

病虫害発生予察特殊報 第1号

害虫名：ジャガイモクロバネキノコバエ
学名：*Pnyxia scabiei*
発生作物：ヒメユリ

1 発生確認経過

上小地域のヒメユリは20年以上前から栽培されているが、近年、葉の黄化による生育不良株や株落ちの発生が多くみられるようになった。上小農業改良普及センターにおいて鱗茎を調査し、キノコバエ類幼虫が食害しているのが観察された。

平成22年4月、この幼虫を飼育し成虫になるのを待って、名古屋植物防疫所を通して東京大学の須島充昭博士に同定を依頼した。その結果ジャガイモクロバネキノコバエであることが判明した。

日本ではジャガイモの害虫として記録されており、平成15年には北海道でユリとネギ、平成21年には千葉県でサツマイモの新害虫として報告されている。長野県内では初めての確認である。

2 形態

雌成虫は無翅で体長2.2mm程度、雄成虫は体長約1.5mm、翅は短く尾端に達しない。体は黒褐色、あごひげが1節からなるのが特徴である(図1)。

老熟幼虫は体長約3.5mmで、頭部が黒色で硬化しているが、腹部は柔らかく半透明で脚がない。幼虫や蛹の形態はチビクロバネキノコバエとよく似ている(図2)。



図1 雄成虫と雌成虫



図2 幼虫

(上小農業改良普及センター提供)

3 生態と被害

成虫は雌雄いずれも飛翔せず、地表面をすばやく歩き回る。25℃における雌成虫の寿命は4日、雄成虫は5日、卵期間3.1日、幼虫期間4.5日、蛹期間3.2日との報告がある。

ヒメユリは、は種から3年間ほ場に植え付けたままであり、発生したジャガイモクロバネキノコバエはヒメユリを食害して、増殖しているものと推察される。

被害の発生は、は種後の7月頃には見られるほ場もあり、症状としては地上部の生育不良や葉の黄化(図3、4)、幼虫の食害による根やりん片の褐変・腐敗が見られる。被害の激しいものでは、鱗茎内部にまで幼虫が食入している(図5)。



図3：生育不良株

図4：葉の黄化

図5：鱗茎内部の幼虫

4 防除対策

- (1) 現在のところ、ジャガイモクロバネキノコバエを対象とする登録農薬はない。
- (2) 発生ほ場では被害残渣を取り除き、発生源を残さないようにする。
- (3) やや湿気が多い土壌を好むので、灌水により土壌が過湿にならないよう注意する。

長野県病害虫防除所
所長 宮島明博
担当 武井正明
TEL：026-248-6471（直通）
FAX：026-248-6473
E-mail：bojo@pref.nagano.lg.jp